

横浜市インフルエンザ流行情報 8 号

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

《トピックス》

流行が小児から成人に広がっています。

【概況】

2015 年第 2 週(1 月 5 日～11 日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、横浜市全体で **25.51** と、第 52 週(2014 年 12 月 22 日～28 日)の 35.83^{※2} から減少しました。区別では**都筑区 50.60** と報告が非常に多い区もあり、引き続き注意が必要です。

年齢別では**小児から成人に流行が広がっています。**

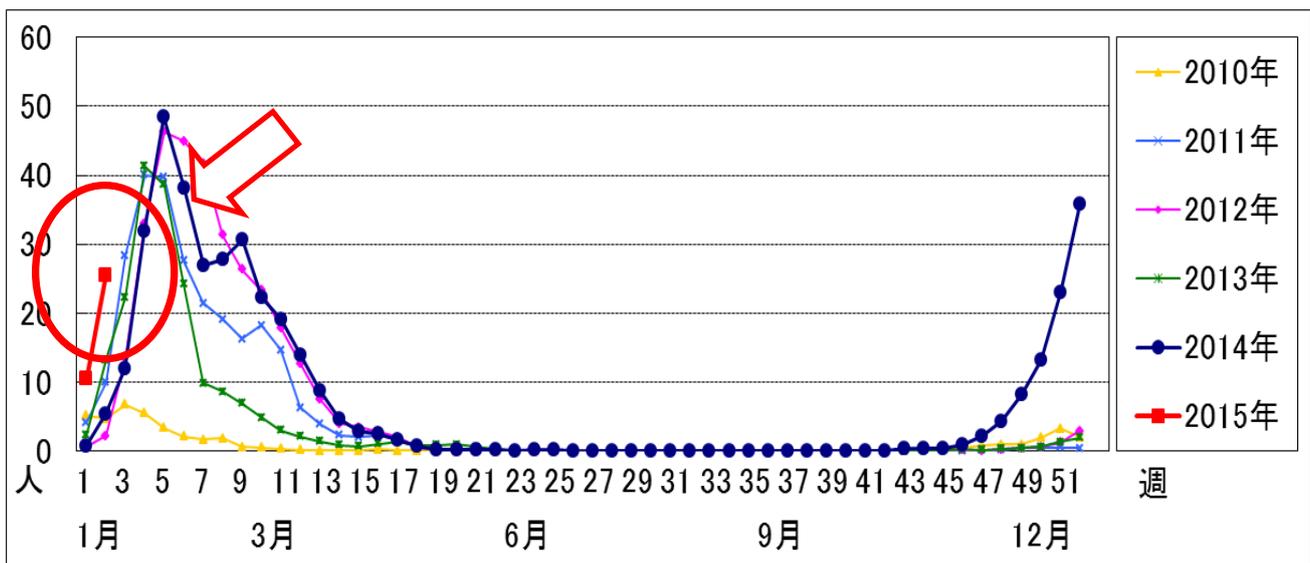
第 2 週の迅速キットの結果は **A 型が 98.8%** とほとんどを占めており、流行の主体は全国同様 **AH3 亜型(A 香港型)** です。いままでのところ市内で検出された株では**主な薬剤への耐性は確認されていません。** ワクチン接種だけでなく、手洗いや早期受診などの対策^{※3} が重要です。

※1 定点・定点とは、毎週インフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内約 150 か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 第 52 週 35.83・前回の流行情報では第 52 週 36.12 と報告しましたが、その後医療機関から追加報告があり、数値が変動しました。

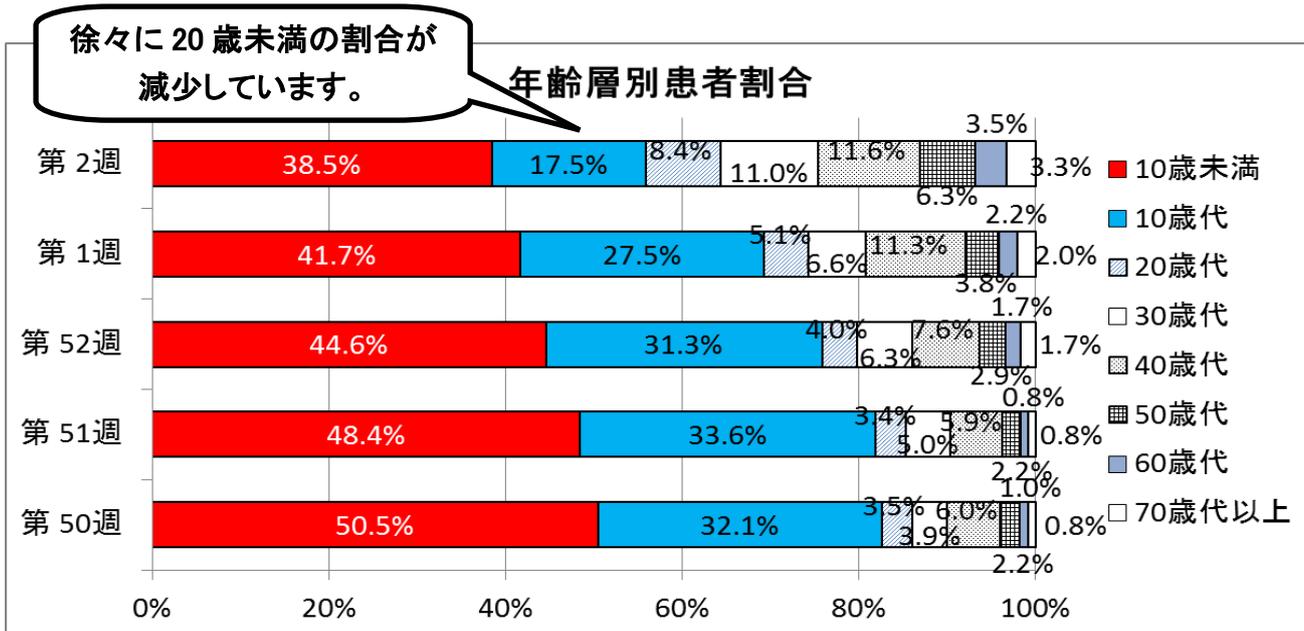
※3 [インフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

- 1 **市内流行状況:** 定点あたりの患者報告数が第 52 週 35.83 から第 2 週 25.51 と減少しました。なお、第 1 週(12 月 29 日～1 月 4 日)は 10.45 と低くなっていますが、年末年始で定点医療機関が休診中のことが多く、流行の実態を正確に反映していない数字です。



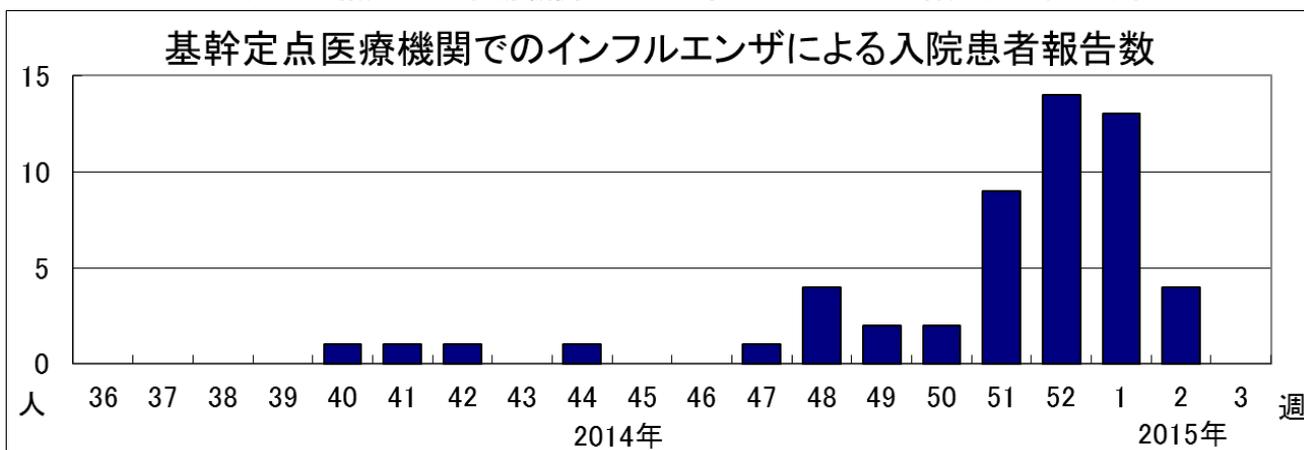
参考: 近隣自治体の流行状況 [東京都](#)、[神奈川県](#)、[川崎市](#)

2 年齢層別患者報告数:直近5週間(第50~2週)では、徐々に流行の主体を占めていた20歳未満の占める割合が減少してきました。このことから、**流行が小児から成人に広がっている**と思われます。

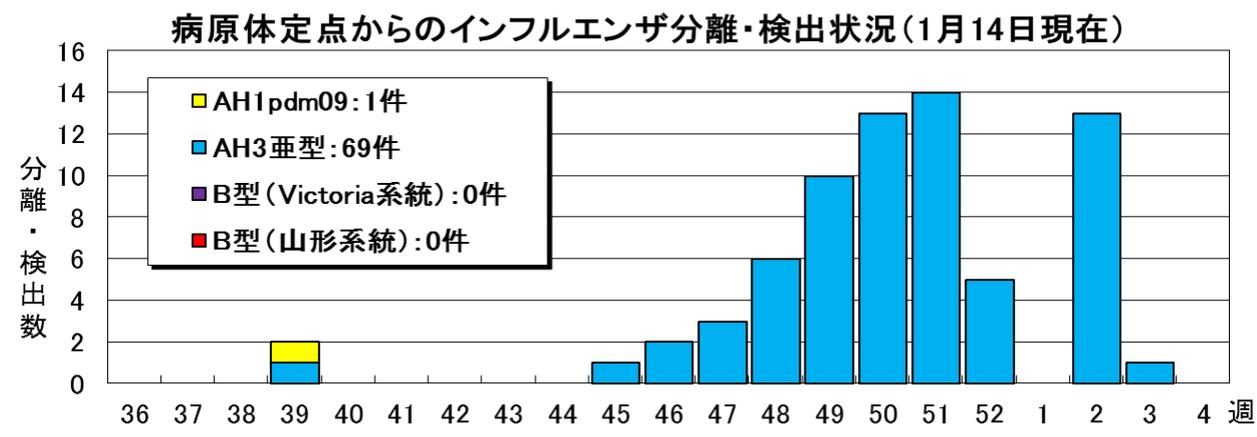


3 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※4}における、インフルエンザ入院患者は第52週をピークに減少しています。

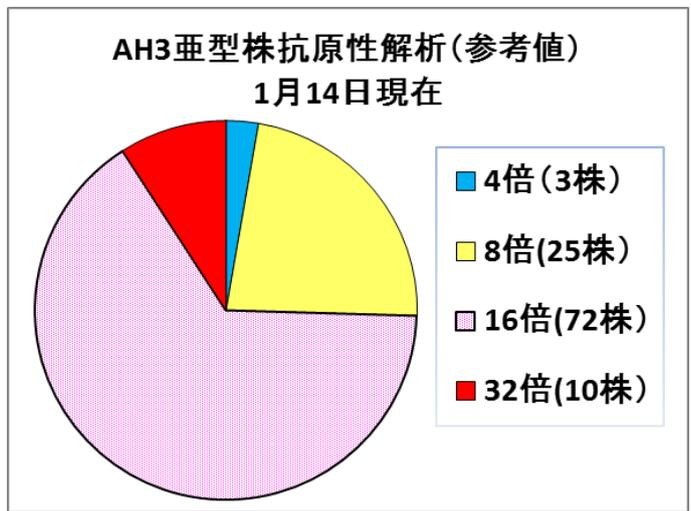
※4 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。



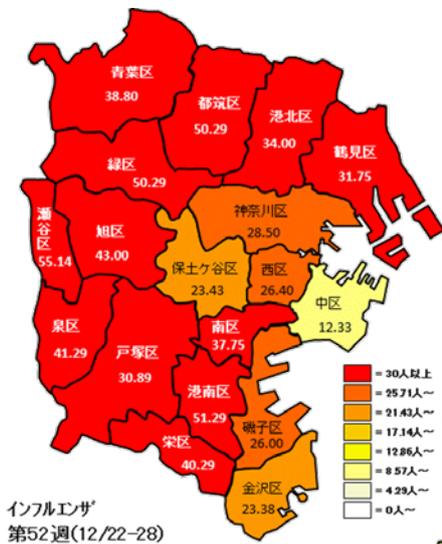
4 市内病原体検出状況:市内では病原体定点から今シーズン計70件インフルエンザウイルスが分離・検出されていますが、第39週にAH1pdm09が1件検出されて以降は**すべてAH3亜型**です。



5 分離株の抗原性解析と薬剤感受性検査:
 市内で検出された AH3 亜型株(病原体定点以外も含む)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)では、**ほとんどの株が HI 価 8 倍以上**でした。一般的に 4 倍以内でワクチン株と類似していると言われています。ただ、今回の解析にはウサギの血清を使用しており、参考値です。正確な結果は国立感染症研究所での分析を待つ必要があります。薬剤感受性試験では、横浜市内の株で今シーズン検査した範囲では、**オセルタミビル(タミフル)、ペラミビル(ラピアクタ)、ザナミビル(リレンザ)、ラニナミビル(イナビル)への感受性低下は認めていません。**



6 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)



※第 1 週(12/29-1/4)は年末年始で休診中の定点医療機関が多く、正確な流行情報を把握できていません。

